



長寿を祝う

「お祝い」伝統のかたち

© 神社本庁 / YUKI KOISHIKAWA

長寿を祝うという伝統

古代中国では「敬老思想」の影響から、長寿を祝い、詩を贈り合う習慣がありました。

それが日本に伝わり、平安時代以降、貴族などの上流階級を中心に、長寿を祝う儀式が広まったといわれています。

祝う歳は当初、四十歳、五十歳など十年刻みでしたが、鎌倉時代以降、

現代のような六十歳、七十歳、七十七歳、八十歳、八十八歳…という節目で祝うことが一般化したようです。

祝宴の前には御神前において「算賀祭」や「祝賀奉告祭」を行うことが習わしだといわれています。

長寿のお祝いは、命の営みを神様に感謝し、年を重ねる喜びや、

家族・友人を大切に思う心を確認し合う節目の儀礼です。

年齢は、数え年、満年齢のいずれかで数えても差し支えないものといわれています。（地域によって様々な習慣があります。）



ゆかりの色



還暦 61歳

じっかん じゅうにし
十干と十二支の組み合わせが六十年で一巡することから、数え年の六十一歳は、古来おめでたい年周りと考えられてきました。自分が生まれた年の干支に戻ることから「赤ちゃんに還る」という意味に重ねられ、赤を基調にお祝いする習わしがあります。「還暦」の代わりに「華甲」という言葉を使ってお祝いをする場合もあります。「華」という字は六つの「十」と一つの「一」から成り、合計が六十一になります。また干支の最初「甲子」の「甲」は、物事の始まりを意味するといわれています。



ゆかりの色



喜寿 77歳

そうしよたい
「喜」という字の草書体は「七」を三つ並べた字で、「七十七」に読めることから、この字を当てるといわれています。その起源は、室町時代とも言われ、本来は厄年の一つであったようです。「寿」には「長命」という意味もあります。



ゆかりの色



半寿 81歳

「八」「十」「一」を組み合わせた「半」の字をあてたものといわれています。また、将棋盤のマス目が「九×九＝八十一」であることから「盤寿」ともいわれます。



ゆかりの色



卒寿 90歳

「卒」の俗字「卒」が「九十」と読めることに起因するといわれています。「鳩」の字の中に「九」があり、音読みも「きゅう」であることから「鳩寿」という場合もあります。



ゆかりの色



百寿/紀寿 100歳

文字通り「百寿」といわれたり、一世紀を表す「紀」に因んで「紀寿」ともいわれます。「百」は数が多いことを表し、その語源は「モロモロ(諸々)」、「モノモノ(物々)」等が転じたものといわれています。六十歳を「下寿」、八十歳を「中寿」、百歳を「上寿」とすることもあります。

70歳 古稀

ゆかりの色



古稀は、中国唐代の詩人・杜甫の漢詩の一節「人生七十年古来稀なり」に由来するといわれています。聖徳太子の定めた冠位十二階の最上位の色が紫であったことから、紫は一般的に高貴な色とされるようになり、やがて長寿のお祝いに用いられることが多くなったようです。

80歳 傘寿

ゆかりの色



「傘」を略した俗字が「八十」と読めることから、この字を当てるといわれています。金茶色とは、金色がかった明るい茶色で、古代中国の陰陽五行説で土を意味する黄色に通じるものともされ、万物を育成・保護する性質を表すともいわれています。

88歳 米寿

ゆかりの色



「八」という字は古来、末広がりで縁起が良いものと考えられてきました。「八十八」を組み合わせた形である「米」の字を当ててことで、日本人の命の源である「米」にも直結し、一層おめでたいものと認識されています。「米の祝い」「よねの祝い」と言われる場合があります。

99歳 白寿

ゆかりの色



「百」という字から「一」を取った文字「白」で「九十九」を表現したものとされています。「百年に一年たらぬ九十九髪我を恋ふらし面影に見ゆ」という和歌が『伊勢物語』にあります。「九十九」は「次百」が転じたもの、また白髪の様子をツクモという水草に重ねたものといわれています。

お祝いのかたち／長寿の節目には神様に感謝し、近い方々と幸せを分かち合いましょう。



来し方をふりかえり、
これからの幸せを
祈りながら神様に参拝します。



参拝の後に戴くおさがりのお神酒には
新たな生命力を戴く
意味があるともいわれています。



身近な人々に感謝し明るい未来を祈りつつ
楽しい時間を共有しながら
お互いに英気を養いましょう。